

奥多摩の世



奥多摩

《第6号》

平成 19 年 7 月 15 日
奥多摩観光協会



～季節だより～

夏、奥多摩が一番賑わう季節を迎えます。山に川に家族連れや若者たちの元気な声がひびき、自然度満点の奥多摩は人も自然も生き生きしています。

8月から9月にかけては、郷土芸能の季節。各地域で行われるのは獅子舞が主流ですが、この時期は、年中行事を通して地域の結束がはかれる絶好の機会でもあります。

今回は、奥多摩町の無形民俗文化財に指定されている神庭集落に伝わる里神楽を紹介します。

神の庭と書いてカニワと読み、奥多摩駅と白丸駅の間が多摩川右岸に集落があります。山の上から一直線に見える発電用の大きな鉄管が目印で、上手に山の神を祀る山祇神社を木の間越しに見ることができます。境内には、ご神木の大きいチョウと社殿に相對して素朴な神楽殿があり、神様と供覧できるように石垣を築いた観覧席が設けられています。

神楽は、8月の第一土曜日の夕刻から夜10時頃まで行われます。ご用とお急ぎでない方は、泊まりがけでの鑑賞をお薦めします。

演目は、源三位頼政の物語「ぬえ退治」や農家の

主人と農民、さらには狐やおかめ等が賑やかに演ずる「種播」など5演目ほど。現在、上演可能なものは8演目ほどがありますが、その年により演目を変えます。まず舞台を清める四方固めや三番叟に始まり、ぬえ退治や種播は定番で演目に合わせた面の数は、40面以上あります。

本来、神楽は、お面をかぶって演じる無言劇です。伝統をかたくなに守る神庭の神楽は、まさに歴史と伝統に裏打ちされた貴重な無形文化財です。それゆえ、解説なしでは、よく分からない場面もありますが、そこは、よくできたもので古老の注釈、解説があるので初めての人にも理解できます。

この夏、奥多摩でいちばんのお薦め、郷土芸能「神庭の神楽」はいかがでしょう。石垣づくりの観客席で地元の氏子のみなさんといっしょになって演者に熱い声援をおくってみませんか。

舞台の作り、養蚕時代の襦袢、演者の衣装やお面等が忘れかけていた郷愁を感じさせてくれます。

(岡崎 学)

～ 旅 さ っ せ ん ～

大多摩トレイル

行 先：古里～奥多摩
開催日：8月29日（水）

かつて江戸を支えた多摩川は全長138kmで、奥多摩は谷深き上流域である。

飲むに良し、洗って良し、流して良し、そして街並みを整える為に木材を運び、人々を豊かにしてきたこの川は、今なお姿を変え、生活を支える川でもある。

夏の終り、崖にへばり付いてるギボウシに目を合わせれば、瀬音に負けじと蝉しぐれ…。それも又いとおしい風情である。

残暑の中、川風と木影に涼を感じつつ、松の木峠に出れば、杉や桧の黒屏風の前に鳩ノ巣集落をオレンジの電車が走り去る。なぜか故郷の風情が目につく。

「あずま家」に腰を下ろせば谷底から吹き上げる風が汗ばんだ肌に心地良い。これぞ森の風である。

しばし民家の花壇を堪能して、鳩ノ巣の奇岩に圧倒されながら、白波立つ急流は、雑念を取り払ってくれよう。膝にちょっと力を入れれば、そこに白丸ダムの堰堤が見える。これは昭和38年に出来たもの

で高さ30.8m長さ61mの白い壁に阻まれ、清流の魚たちは何ともしづらくて行き場なしだった。

体長30cm以下の魚たちの背びれ、腹びれ、尾びれではとても登れない絶壁の「オナゲキ」に、平成14年山女や岩女達が遡上出来るよう水路（アイスハーバー型）の魚道が完成。お魚に訪ねるべく一見を。

人によって作られた自然回復、想いは感ずる人にお任せしたい。白丸湖の水面に深緑の対岸が映る静けさの中、奥多摩駅に向かう。その手前に奥氷川神社があり、樹齢350年高さ50mの杉の大木は、東京でも一番とか。仰げば三角形の空に入道雲が流れ、この大木が覆いかぶさることもある。「よろけないでネ」

この奥氷川神社、中氷川神社（所沢市）、一ノ宮氷川神社（さいたま市）は、武蔵三氷川と呼ばれ、地図上でほぼ一直線に結ばれ、その先は、なぜか京都に…。

8.5kmのほど良い疲れとともに帰りの車窓から今来たこの道に想いふける。

もうすぐ紅葉の季節、白丸湖の水面いっぱいには紅色のモミジの葉が広がり、ゆったりとサザ波にゆれる頃、心の洗濯に又お運びを…。（古屋勝利）

～ 行 っ て き た め っ ぽ ～

アカヤシオの咲く川苔山

アカヤシオの咲く川苔山を訪ねて、4月26日（晴天）35人で川苔橋から歩き始めた。この付近は落石が多いため、30分程歩いて広い安全な場所で開会式を行い、事務局からは奥多摩のわさび・鹿カレー等の宣伝があり、準備運動・注意事項等を行い、細倉橋からいよいよ川苔谷に沿って狭い道を慎重に歩を進める。

5日前の下見では、足毛岩付近から上は残雪があったので、特にガイドは気をもんでいた。今年の事業で一番参加者が多いとのことだ。谷筋に入ってからミソッチョ（ミソサザイ）の高らかな囀りを聞きながら、もくもくと登ると百尋の滝が目前に迫ってきたが、今日はここも素通りだ。幸い全員が無事難所を通過して、ほっとした時、足毛の肩の付近で淡い色のアカヤシオの花が目に入ってきた。

私たちの来るのを待っていたかのように歓迎してくれた。この美しさに息を切らせて登ってきた疲れを、一息に吹き飛ばしてくれた。みんな感動に酔

いしれた様子だ。私たちガイドも下見では見ているが、霜害や雪害にあっていたらと思ひ参加者には期待しないようにと、出発時に言っておいたが、今日この艶やかさを見たらほっとして、胸をなでおろすと同時に嬉しさがひとしおだった。

こうして自然の中の厳しさに耐えて咲いた、アカヤシオをみられたことは本当にラッキーなことだ。その時期の天候に左右されるので企画するのも難しい。

川苔山頂でもいい天気恵まれ、遠くは東京で一番高い山・雲取山、長沢背稜等々の山並みの眺望もたっぷりでき、参加者全員が満足したようだ。山は下山での事故が多いので、特段の注意を促しみんな足取りも軽く、予定時刻前に目的地の鳩ノ巣に達者で到着した。

私たちに感動をくれたアカヤシオの「華」ありがとう。

（岡部秀雄）

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その4 ～

天祖山での悲劇

11月4日午後1時24分、日原駐在所の不在転送電話から青梅本署に「日原で仲間が転落し、頭などにケガをした」と女性の声で一報が入った。通報者は遭難者の同行者で、日原駐在所で待っているという。山岳救助隊員を招集するとともに、消防にも連絡し救急車の要請をした。

先発として午後1時35分、交番にいた救助隊員4名が出動した。緊急走行で日原駐在所に着くと、今日週休の前田隊員も駐在所に戻っており、通報者からの事情を聴取していた。

S県の山岳会仲間である中高年女性5名で昨日、日原から鷹ノ巣山に登り雲取山まで縦走し、雲取山荘に1泊した。そして今日、芋ノ木ドッケから長沢山、水松山、天祖山と辿り、天祖神社の表参道である八タゴヤ尾根を日原の八丁橋に下山中であった。八タゴヤ尾根末端の南側に付けられたツツラおりの登山道を八丁橋に向かってジグザグに下っていたところ、小尾根の稜線で、先頭から2番目を歩いていた遭難者Aさん(68歳)の足がもつれ、西側の急斜面を転落して行き姿がみえなくなった。

同行者らは急いで日原林道まで下山し、小尾根を東側に回り込むと、遭難者は林道法面に張った落石防護網と岩場の間に落下して、挟まるような状態で倒れていた。

仲間が協力して10分ほどかけて遭難者を何とか網の中から引き出した。今は林道上に寝かせてあるが、頭、腕などを相当負傷しており動かすことができない。意識はあるという。

私たちは再び車に乗り込み、緊急走行で現場に向かった。小川谷橋から日原林道に入り、八丁橋を渡りゲートを回り込むと遭難パーティの姿が見えた。

午後2時05分、現場に到着した。遭難者のAさんは林道上で下にシートや防寒着などを敷かれて横たわり、その上にフリースなどの衣類を掛け保温されていた。頭は三角布で止血されていたが、擦り傷だらけの顔で目をつむったまま、さかんに痛みと寒さを訴えていた。

「どこが痛い」と聞くと「手が痛い」と言う。意識はあるようだ。レスキューシートを出し、保温処置を施すが、50メートル以上の距離を落下していることから、頸椎の損傷も考えられるので動かすこともできない。一刻も早い病院搬送が必要だ。「もう直ぐ救急車がくるから、頑張るんだぞ」

と大きな声を掛けると、かすかに頷くような仕草をする。

救急車の到着が遅れている。救急車到着までの介護を隊員に任せ、私はAさんが転落した場所を確認するため、デジカメを持って八丁橋登山口から登山道を登った。ここから八タゴヤ尾根に出るまでの約30分が、南側の急斜面に付けられたツツラおりの登山道である。ガレた急斜面に石積みをし、細い登山道がジグザグに続いている。下を見ると日原林道まで見通せる場所もあって、高所恐怖症の人なら足がすくむような所である。

登り始めるとすぐ、下山してくる何人かの中高年登山者と会う。道をあげ、「あと少しで下に着きます。急傾斜ですから気を抜かないで下山して下さい」と声を掛けながら登った。

7、8分登ると、小尾根の稜線に出る。おそらくこの稜線からAさんは西側の急斜面を転落して行ったのではないだろうか。しかし落ちた痕跡を探すが見つからない。この先に道が小尾根の西側ルンゼを回りこんで付いている石積みの場所があるので、そこまで登ってみる。そこからは下のルンゼまで見通せた。しかし転落痕は見つからなかった。

上のほうから男性1名、女性2名のパーティが降りてきた。男性が先頭で、ダブルストックの女性は少し遅れ気味だった。私は道をあげ、「もう少しで下に着きますからね。ここから急になりますからゆっくり気をつけて降りて下さい。いいですか、気を抜かないで下さいよ」と、自分でも少ししつこいかと思うほどの注意を与えた。「分かりました。気をつけます」と3人は下って行った。

私も下のルンゼの写真を2枚ほど撮り、もう一度先ほどの稜線で転落痕を探そうと下山にかかった。50メートル先をゆっくりと下っている3人が見えた。

午後2時50分、下に行くパーティから「あっ」という声が聞こえ、続いて「ガラガラ」と大きな落石の音が上がった。私は急いで下った。取り乱した男性と女性がそこにいた。「どうした、落ちたのか」と声を掛けると「落ちました」という。私は瞬時にいま起こっている状況が判断できた。下の方ではまだガラガラと落石の音が聞こえていた。「ラーク、ラーク」と下に大声で怒鳴った。この真下の林道ではAさんがまだ横たわっているかもしれない。そして大勢の救助隊員もいるはずだった。私は残った2人に「いいですか、ゆっく

りと慎重に降りてきてくださいよ」と言い置き、走るようにして急な登山道を下った。

日原林道に降りると、すでに消防の救助隊も到着して、落石に緊張して動き回っていた。私はAさんが横たわっていた場所に走った。うちの隊員もいたので、「どうした、大丈夫か」と声を掛けたら、「大丈夫です。でもすごい落石でした」と興奮して言う。「石だけか、人は落ちてこなかったか」と聞くと、「石だけです」と言う。どこかに引っ掛かっている。「いまもう1人落ちたんだ。救助用具を持ってすぐ上に来てくれ」とみんなに大声を掛けた。

Aさんが消防隊員によって担架で運ばれてきた。「もう1人落ちた」と言うと、取りあえず消防はAさんの救助を先にやると言う。Aさんは消防にお願いし、うちの隊員数名にザイルなどを持たせ、登山道を引き返した。

同行の2人は無事に降りたのだろう、現場にはいなかった。私は「ここから落ちたんだ」と言って転落箇所を示し、太い立ち木を支点に50メートルザイルをセットさせた。

転落したのは、先ほど私が上で声を掛けたとき、「分かりました。気をつけます」と答えて下って行った女性だ。ここからは見えないが、「何とか無事でいてくれ」と祈るような気持ちで素早く腰にハーネスを着けた。

まだ下には大勢の隊員がいる。落石の危険があるので、無線で下の林道をクリアーにしてもらい、私がトップで、浮石を落とさないようにゆっくりと下降していく。途中、ストックの片方やタオルなどが落ちている。10メートルも降りると傾斜はさらに強くなる。ザイルを手繰りながら下に声を掛け、どこかに引っ掛かって無事でいてほしいと、探しながら下降するが姿が見当たらない。

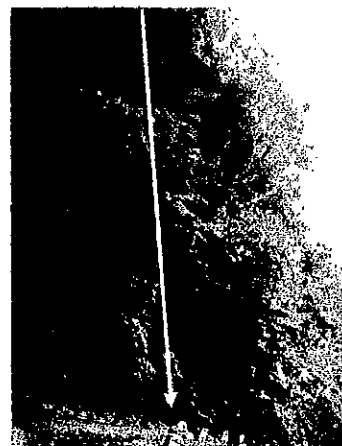
40メートルほど下降すると、落石防護網上部の暗がり、人影と見られる黒い塊が見えた。「おーい、おーい」と大声で呼びかけるが、返事もなく動かない。急いで下降し傍まで行き声を掛ける。転落した女性だった。両手を上げた四肢は不自然な方向に向いておりピクリとも動かない。顔はシャツの中に隠れていて見えない。上からちょうど50メートルザイルがいつぱいの所だ。私はザイルにぶら下がったまま、声を掛けながら肩を揺すった。何の反応も示さない。手首の脈を探したが、冷たい手首に脈はなかった。「何てことだ」、「さっき、気をつけて降りるって言ったじゃないか」。山と同化したように動かない姿を見て、私は愕然とした。

下から声が聞こえる。横に移動すると、10メートルほど下が林道で救助隊員の姿が防護網越しに見える。「ここにいたぞー」と叫ぶと、みんな上を見て「どうですかー、大丈夫ですかー」と聞いてきた。私は首を横に振るしかなかった。

上から消防の五十嵐隊員がザイルで下降してきて、「ダメですか」と聞いた。「残念だがダメかもしれない。とにかく一刻も早く病院に運ぼう」と答え、救助作業に入った。

下からバスケット担架を上げてもらい、防護網の隙間から降ろすことにした。若手の佐藤隊員も降りてきて、3人で下からバスケット担架をザイルで引き上げる。防護網にセルフビレーをとり、遭難者からザックを下ろす。ズシリと重いザックだ。不自由な態勢で急斜面に固定されたバスケット担架に動かない遭難者を乗せることは、容易な作業ではない。立った状態で乗せ、担架から滑り落ちないようにバンドでガッチリと固定した。

あとは下の林道まで担架を滑り降ろすだけだ。消防の五十嵐隊員が担架に付いて下降し誘導する。佐藤隊員が支点でブレーキを掛けながらザイルを繰り出す。私は途中まで担架に付いていき、真上でザイルを調整する。金網に引っ掛からないように、ゆっくりと降ろす。「到着」と下から五十嵐隊員の声が聞こえた。遭難者を乗せた担架を、網の間から林道に出したものだ。遭難者の重いザックもザイルで降ろした。それから私と佐藤隊員は、残った資器材を撤収し、1人ずつザイルで下降した。



転落箇所

思いも掛けないダブル遭難であった。そして2人も予断を許さない厳しい状況だ。小尾根を回り込んで八丁橋の方に向かうと、ちょうど遭難者をピックアップしたヘリが、方向を変えて飛び去るところであった。

登山口に遭難者の同行者である男女が待っていた。2人は私を認め、「あんなに注意して頂いたのに、申し訳ありません」と頭を下げた。私も「残念ですが、ちょっと厳しい状況のようです」と答えた。車で病院に向かう2人に対し、「動揺しているでしょうから、車の運転も十分に気をつ

けて向かってください」と助言した。

2件目に遭難した女性はH市のSさん(55歳)。パーティ3名は昨日、八丁橋に車を止めて、この日原林道を終点まで歩き、富田新道から雲取山に登った。昨夜は山頂の雲取避難小屋に泊り、そして今日、最初に転落したAさんたちのパーティと同じコースを辿り、この八丁橋に下山してきたものであった。

この2件の遭難に共通して言えることは、2人とも登山経験の長い中高年の女性である。2つのパーティは、どちらも2日間にわたる縦走で荷も重く、相当の健脚向きのコースであった。

1日目は稲村岩尾根にしる、野陣尾根の富田新道にしる、奥多摩では屈指の急登である。2日目の長沢背稜から天祖山コースも距離があり、急なアップダウンもある。そして疲れた足に最後の30分は特に急な下りだ。

ここで私が問題としたいのは、遭難した2人はダブルストックを使っていたということである。長期間の縦走などでは、私もダブルストックを使うことがある。登りでは大きな推進力となる。しかし下りでは、相当慣れていないとバランスを崩しやすい。疲れてくるとついストックに頼ってしまう。特に急な下りやガレ場、岩場などでは危険が伴う。これがストックがなければ疲れていても自分の両足で降りるしかないから、ゆっくりでも慎重になる。咄嗟のときには両手も使える。賛否両論はあると思うが、私は急な下りでのダブルストックは賛成できない。

山岳救助隊本部のある奥多摩交番に戻って、刑事課からの電話で、Sさんの死亡が確認されたことを聞いた。Aさんのほうも即手術で予断を許さないという。

奥多摩で紅葉本番を迎える前の、何とも痛ましい遭難事故であった。私自身この遭難には参った。亡くなったSさんと最後に言葉を交わしたのは私かもしれない。強いショックである。トラウマとならなければよいのだが。

昨年も紅葉の天祖山で2件の遭難事故があり、2人が死亡している。山頂に天祖神社を祀る、古くから諸人の崇敬の篤い信仰の山「天祖山」。この静寂の山も中高年の登山がブームとなって、遭難事故の多い山と変貌しつつある。

H18. 11. 24

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 ^{こん} 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(6)

鳩ノ巣という地名は、公図にはない地名です。しかし、鳩ノ巣溪谷やJR鳩ノ巣駅として、大字の棚沢よりもよく知られています。

昔は、奥多摩の山々から伐り出された木材は、修羅やまくり出しによって小谷に落とされ、沢を堰き止めた小ダムへ集めてから、鉄砲出しという堰をいっきに切る方法で、大川(多摩川)まで流し、大川へ出した木材は、水流にのせて管流し(1本ずつ)に流し、数多の難所を乗り切ってから、鳩ノ巣の下流にある土場で筏に組み、河口の六郷まで運びました。

出材チームは、山主から森林を買い求める元締め(木材業者)、山仕(伐木夫)、木屋衆(出材夫・ひょう)、庄屋(頭)、小庄屋(小頭)、木鼻(段取り役)木尻(敷収役)、かしき(炊事役)、茶坊(使い走り)等によって構成されています。

洪水等もなく、木材が無事に土場に着了たことを喜んで、元締めから従業者たちに振る舞い酒が用意され、その労をねぎらいました。これに対して、従業者たちは、元締めに祝い唄の「木遣り唄」を歌いました。

この木遣り唄の中に、「1の悪場が天狗島、2の悪場が惣岳で、3の悪場が鳩ノ巣で…」とありますが、最後の難所が鳩ノ巣でした。

江戸時代の江戸は、火災が多い街で復興のための資材として、丹波山、小河内、氷川、日原から木材が伐り出されました。多摩川沿いの各所に飯場小屋が建てられ、鳩ノ巣の魚留滝の上にも飯場小屋がありました。この飯場が祀った水神社の森に、2羽の鳩が巣をつくり、巣作りの様子がまことに睦まじかったので、霊鳥として愛護しました。そのため、この飯場は、鳩ノ巣飯場と呼ばれ、道行く人々の目標とされるようになり、いつしかこれが地名となり、本来の棚沢という地名よりも知られるようになりまし

(岡部義重)

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたまNo.549

お断り

誌面の関係上、「山の花だより」は、休みました。次回をお楽しみに!

ガイドだより ～妙琴蟬とミョウキン和尚～

今年は例年になく少雪で暖かいと思っていたら4月下旬に雪が降り“御前山のカタクリ”のイベントも中止を余儀なくされるような珍しい天候であったが、5月になって天候も落ち着きまぶしい新緑に春を感じ、奥多摩を歩けば藤、アカヤシオ、シロヤシオが「良くいらっしやいました」と我々を迎えてくれていよいよハイキング、登山シーズンが始まった。

好天に浮かれて山に足を向けるとエゾハルゼミの音が聞かれるようになった。奥多摩で手軽にこの声を楽しめるのは奥多摩湖畔の倉戸山で奥多摩観光協会が毎年“妙琴蟬を訪ねる倉戸山”のイベントを行っている。妙琴蟬の鳴き声は“ミョウキン ミョウキン ミョウキン ケケケケ”と聞こえ、初めて聞くとこれが蟬の声とはとても思えない鳴き声である。私も初めて聞いたときは何の鳥の声かと思ったほどである。そして妙琴蟬だと聞いて調べてみたがこのような名前の蟬は見つからなかった。

これは奥多摩に縁の深い岡部、原島、金の3氏が鳴き声から「妙琴蟬」と名付けたとのことである。エゾハルゼミは体長40mmほどで透明な羽根を持ちヒグラシに似た蟬で全国的に分布し、寒冷地で広葉樹を好むので関東以西では800～1000m以上に生息するので倉戸山はほぼその条件を満たす生息地であるようだ。ミョウキンゼミのネーミングのうまさとそれを「妙琴蟬」と表したのには感心したものである。



エゾハルゼミ

* * *

数年前、何気なく「山と渓谷」誌のページをめくっていると「大朝日岳のミョウキン和尚」という活字が目にとまった。執筆者は大朝日岳の登山口にある“朝日鉱泉ナチュラルリストの家”の管理人である西澤信雄氏で、氏によると、不思議な鳴き声を聞き地元の人に尋ねると『昔、ミョウキンという偉いお坊さんが、頑張って修行していたが、なかなか解脱できなくて短い人生をはかなんで、それならと短い命を精いっぱい生きるゼミになって山に入ったのだということらしい』ということである。

この記事を読んで奥多摩と山形の離れた地域でも同じように感じるものだとその偶然に驚いた次第である。
(清久光俊)

施設案内

☆ 旬彩食房『うさぎ庵』

せせらぎの里美術館の隣で、多摩川の素晴らしい渓谷が一望できる新規開店の和食処です。

レトロな空間の中で旬の素材を使った彩り豊かなお料理をお召し上がり頂けます。ご来店をお待ちしております。(営業時間：11時から18時)

場所 青梅線川井駅下車 徒歩約20分

電話 0428-85-5155 月曜日休業

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、夏から秋に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

① 8月3日(金) 丹三郎からレンゲショウマを訪ねる

応募締切日 7月18日(登山)

② 8月15及び16日(水・木) 夏休みチビツ子探検隊

水生昆虫とカジカさがし(親子25組)

応募締切日 8月3日(ハイキング)

③ 8月29日(水) 大多摩ウォーキングトレイル

応募締切日 8月3日(ハイキング)

④ 9月27日(木) 白丸散策と川合玉堂の足跡を訪ねる

応募締切日 9月10日(ハイキング)

* 募集人員：各回30名、参加費：500円
(2は別途)

《 編集後記 》

夏本番！

涼しい奥多摩へ来させえ！

次号は、平成19年10月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会